考古学 と 火山 灰 層 序¹⁾

——特に関東地方を中心とした旧石器時代の層位的出土例と石器群の様相——

白 石 浩 之²⁾

Tephrochronology and Archaeology—An Analysis of Upper Paleolithic Culture in Kanto District

Hiroyuki SHIRAISHI

Study of the paleolithic culture based on the stratigraphy had begun with an excavation of the Iwajuku site, Gunma Prefecture, and advanced after 1968, when so-called “After Tsukimino-Nogawa” cultural stratigraphy was established. More than 10 cultural layers are found from the Tachikawa Loam which is 3 to 7 m thick and divided into 6 or 8 strata by tephra. Four main industries can be distinguished in the cultural layers; (1) industry mainly composed of becs industry, (2) knife-like backed blade industry, (3) microblade industry and industry mainly composed of points.

Paleolithic materials in the Kanto district were examined on the following 7 items; (1) scale of the site based on the number of artifacts, (2) concentration of artifacts, (3) distribution of fired pebble heaps, (4) stone tool assemblages, (5) lithic composition, (6) types of knife-like backed blade and (7) blade technique and its blanks. These analyses enabled to make a correspondence between cultural layers among sites in upper Nogawa River on the Musashino upland, and analysed sites were classified into 3 types; (a) the site with a single cultural layer, (b) the site composed of continuous cultural layers, (c) the site composed of several discontinuous cultural layers. The continuous cultural layers had a tendency to produce bigger amount of artifacts than the discontinuous cultural layers. Changes in the lithic feature of discontinuous cultural layers seem to be rapid, suggesting an intermittent occupation of the site. This phenomenon can be recognized not only successive cultural layers in a site, but also cultural layers of the same strata among different sites. Comparison between the cultural layers below the AT (Aira-Tn ash) and those above the AT showed that lithic features changed remarkably at the AT boundary. It is interesting that changes of the lithic tradition had a close correlation with the environmental change.

は じ め に

関東地方における旧石器文化の研究は、1960年代後半の、神奈川県月見野遺跡群（明治大学考古学研究室ほか、1969）や東京都野川遺跡（野川遺跡調査会、1971）の大きかりな発掘調査を契機として、各地域で層位的出土例をもつ石器群が続々と検出され、併せて各層位も平面的に広く捉えられている。そしてさらに関連諸科学の

協力によって、今までにない多くの情報が収集されている。

こうした情報多量の中で、私たちは、多くの層位的出土例をもつ石器群を、どのように位置づけ、評価していくか、確固たる方法論のもとで、検討していく必要がある。

以上の点から、筆者は、関東地方の石器群を層位的に概観する。これが第1点の視点である。第2点は関東各

1) 1982年8月20日、日本第四紀学会シンポジウムにて発表。

2) 神奈川県教育庁文化財保護課。

地の層序，とりわけ鍵層となる 黒色帯や AT の状態をみることにする。第3点は石器群を AT 以前と以後に大別して，野川上流域の遺跡群の中で分析してみた。そして第4点は関東各地の石器群の様相を検討し，該期を展望しようと思う。

1. 石器群の層位的出土例とその概要

関東地方の石器群は，立川ローム層の全層に認められる。下部より(A)錐状石器を主体とした石器群→(B)ナイフ形石器を主体とした石器群→(C)尖頭器を主体とした石器群，細石刃を主体とした石器群よりなる。(A)は1文化層，(B)は1~11枚，(C)は1~3枚の文化層で構成されている。(A)と(B)は敲石，礫器，石斧，ヘラ状石器，スクレブラ，台石等の大形石器が両者の石器群に伴出する。(B)と(C)の石器群はナイフ形石器と尖頭器，ナイフ形石器と細石刃が共伴する例がある。従って(A)~(C)の石器群は広い意味で一系統の発展過程と理解するか，異系統と考慮するか問題となろう。

(A) 錐状石器を主体とした石器群

立川ローム下底の石器群は第2黒色帯下位のX層³⁾で認められる。相模野台地では相模野下位スコリア(S₂S)より下位のローム層(L₆)より出土している。また北関東地方では黒色帯中で検出されている。石器群の集中地点は1~2カ所の小規模なものであるが，東京都中山谷遺跡(小田，1975)では多量の不定形剥片が看取され，総数736点が出土している。石器組成は錐状石器，スクレイパーを主体にナイフ状石器，彫器，使用痕ある剥片，石核といった小形の石器と，敲石，磨石，礫器，石斧，ヘラ状石器，スクレブラ，台石等の大形の石器よりなる⁴⁾(図1，1・2)

(B) ナイフ形石器を主体とした石器群

ナイフ形石器を主体とした石器群は，X，K，VII，VI，V，IV層に看取されている。そのうちK，IV層に上層，中層，下層の文化層が重複される例が多い。

最も古いナイフ形石器を主体とした石器群はX層より検出されている。石器の集中地点は1~8カ所で形成されているが，集中規模は石器の数量からみて小規模といえる。礫群は一般的ではないが，1・2カ所が形成される遺跡もある。該期の石器群は，武蔵野台地では8遺跡，相模野台地では1遺跡，下総台地が5遺跡，北関東地方では1遺跡が確認されている。石器組成はナイフ形石器，スクレイパー，ピエスエスキュー，加工痕ある剥片，使用痕ある剥片，剥片，石核，敲石，礫器，石斧，ヘラ状石器，スクレブラ，台石よりなる。ナイフ形石器

図1 関東地方における旧石器時代の層位的出土例

1・35：錐状石器，2：ナイフ状石器，3~5・8~12・14~16・20~23・28~30・33~34・36~38・42~44：ナイフ形石器，7・13：石斧，6・17・18・25・26・32・39・45・47・49・50・51・54：スクレイパー，19・31・40・46：彫器，24？・27：角錐状石器，41・48・57：尖頭器，47・52・53：細石刃核，55・56：細石刃

は縦長剥片の基部及び先端部に加工を施したB型を主体に、剥片の末端を加工したE型が認められる。ナイフ形石器の量はそれほど多くないが、ナイフ形石器が検出される遺跡は、スクレイパーが共伴し、ナイフ形石器が認められない場合は、スクレイパーも出土していない(図1, 3~7)。

第2黒色帯下部より検出された石器群は、武蔵野台地では18遺跡で、Ⅸ層が相当する。北関東地方では1遺跡が確認されている。東京都高井戸東遺跡(小田・伊藤・C. T. キーラー・重住, 1977)、はけうえ遺跡(小田・阿部・中津編, 1980)等では、黒色帯下部中に上層~下層まで、2~3枚の文化層が看取されている。石器の集中地点は1~7カ所とバラエティーに富んでいる。但し高井戸東遺跡Ⅸ区中や鈴木遺跡都道地点(戸田・実川ほか, 1981)を除いては、石器の数量が僅少といえる。礫群は検出される例が多く、2~8カ所よりなる。石器の組成はナイフ形石器、スクレイパー、ピエスエスキュー、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片、石核、敲石、礫器、石斧、ヘラ状石器、スクレプラよりなる。石器組成では、先のⅩ層のナイフ形石器を主体とした石器群のものに類似する。ただ若干異質な点は、該期では礫器やヘラ状石器の伴出が目立っていること、そして新たに磨石の共伴が認められることである。ナイフ形石器は、横長剥片を素材とした切出形石器(C型)とB型、そして一側縁を背部加工したD型で組み合わせている。特にC型は錯向剥離が特徴的である。剥片剥離作業は横長剥片、縦長剥片を作出しており、多方向の剥離面をもつ石核、瀬戸内技法第2工程を示す石核、打面を直角に転位した石核構成よりなる(図1, 8~13)。

第2黒色帯の上部より出土した石器群は、武蔵野台地では13遺跡よりなる。Ⅶ層に対比される。遺跡の集中地点は1~7カ所で構成されるが、1カ所の小規模なものが多い。礫群はあまり顕著とはいえない。石器の組成はナイフ形石器、スクレイパー、彫器、錐状石器、使用痕ある剥片、加工痕ある剥片、敲石、礫器、台石よりなる。この段階では敲石、礫器が目立ち、石斧、ヘラ状石器、スクレプラ、磨石は全く検出されていない。東京都平代坂遺跡Ⅶ(小田, 1974)、前原遺跡Ⅶ(小田・伊藤・C. T. キーラー編, 1976)、中山谷遺跡Ⅶはナイフ形石器が検出されておらず、石器総数も少ない点は共通している。またナイフ形石器の数量は12遺跡が10点以下

と僅少である。ナイフ形石器の素材は縦長剥片と横長剥片の両方を用いている。ナイフ形石器の型式はB・D型を中心に、柳葉形で両側縁加工を施したA型で組み合わさっている。D型は東京都西之台遺跡B地点(小田, 1980)例のように、横長剥片を素材としたものもある。該期の剥片剥離作業は、縦長剥片、横長剥片を剥離する石核構成よりなる。一定の場所に打面を設けず、多方向の剥離面をもつもの、両設打面のもの、単設打面の石核で構成されている。縦長剥片は概して大形の整った形状を呈すものが多い(図1, 14~19)。

第2黒色帯上位の黄褐色ローム層はATを含んでいる。武蔵野台地、下総台地ではⅦ層、相模野台地ではB3上面層に対比される。遺跡は11カ所確認され、武蔵野台地では8遺跡、相模野台地は2遺跡、下総台地が1遺跡の割合となっている。遺物の集中地点は1~5カ所よりなり、又拡散した例も多い。一遺跡内の石器総数も神奈川県寺尾遺跡(鈴木, 1980)例のように1898点と多く、しかも3カ所の規模の大きい遺物集中地点と、2カ所の小規模な集中地点で構成されている。ナイフ形石器の数量も他遺跡例を抜きん出ており、拠点的な大規模遺跡であったものと類推されよう。礫群は概して顕著でないが、小規模な例はある。石器組成はナイフ形石器、スクレイパー、彫器、錐状石器、使用痕ある剥片、加工痕ある剥片、剥片、石核、磨石、まれに敲石、台石、礫器を伴っている。該してⅦ層で卓越していた礫器は非常に僅少となっている。それに対して、ナイフ形石器の量は凌駕している。ナイフ形石器は主として縦長剥片を素材としてA~D型、剥片の末端を加工したE型、三角形に両側縁加工を施したF型で構成されている。東京都鈴木遺跡都道地点(織笠, 1978)ではA・B・D・E型で構成されるのに対し、寺尾遺跡ではA~F型よりなる。一方西之台遺跡B地点、はけうえ遺跡ではA・D型、神奈川県地蔵坂B3上面ではA・D・E型のナイフ形石器で構成されている(相模考古学研究会編, 1974)。剥片剥離作業は、未調整の打面より剥離した縦長剥片、打面を直角に転位した石核、打面を交互に剥離している石核よりなる。作出された剥片は、寺尾遺跡のように打面に細部調整をもち、幅広ですづまりの縦長剥片が主体となっている(鈴木, 1980)(図1, 20~26)。

第1黒色帯中より検出された石器群は、武蔵野台地では12遺跡、下総台地では2遺跡、相模野台地では2遺

3) 図1の柱状図及び文中の層位名は、ことわりがない場合は、武蔵野台地で慣用されている層位名を用いることにした。またⅩ層は錐状石器を主体とした石器群をⅩ層a。ナイフ形石器を主体とした石器群Ⅹ層bと便宜仮称する。

跡が確認されている。武蔵野台地、下総台地ではV層、相模野台地ではB2L下底が対比されようか。遺物の集中地点は1カ所が多いが、はけうえ遺跡のように18カ所、鈴木遺跡都道地点（戸田・実川ほか、前掲）のように6カ所で構成される例もある。礫群ははけうえ遺跡の12カ所、鈴木遺跡都道地点では6カ所、西之台遺跡B地点では2〜3カ所が認められているが、全般的に礫群は顕著とはいえない。石器の組成はナイフ形石器、スクレイパー、錐状石器、使用痕ある剥片、敲石、台石等が伴出している。遺跡の様相は（1）ナイフ形石器やスクレイパーが0〜2点と少なく、規模の小さい遺跡と、（2）鈴木遺跡や埼玉県打越遺跡第3地点（荒井・田中、1978）例のようにナイフ形石器やスクレイパーがややまとまっている遺跡、また（3）東京都野川遺跡（小林・小田、1971）例のようにナイフ形石器は出土せず、スクレイパーが多量に検出される遺跡の3様相がある。第1の様相をもつ遺跡は敲石、石皿、磨石、礫器の大形石器が伴出する場合がある。ナイフ形石器はB・C型を中心にA・D・E・F型がまれに共伴する。相模野台地の神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡（中村、1982）、地蔵坂遺跡B2L下底では縦長剥片を素材としたB・D〜F型のナイフ形石器が検出されている。剥片剥離作業はチョッピングツール状の石核で、交互に横長の剥片を剥離していくものや、平坦打面で直角に打面転位をもつもの、礫面より直接打撃を加えて、寸詰りの縦長剥片を剥取している。これらのことから該期の石器群は、先行する石器群と後行する石器群の様相を保持しているといえようか。

第1黒色帯直上の硬質ローム層から検出される石器群は、武蔵野台地ではIV下層ないしIV中2層に対比し、27遺跡が確認されている。相模野台地ではB2L〜B2Uの層位より検出されたもので、11遺跡が発見されている。また多摩丘陵ではVH下層から7遺跡、下総台地ではIV下層から9遺跡、そして大宮台地では3遺跡の計57遺跡が検出されている（神奈川考古同人会編、1982）。該期は2〜3枚の文化層が層位的に検出される例がある。遺跡数が急激に増加している点は注意される。また遺物の出土数も500点以上の遺跡が多くみられ、遺物の集中地点の数も多くなっている。礫群は普遍的に認められ、大規模に構成される。石器組成はナイフ形石器、角錐状石器、錐状石器、彫器、スクレイパー、使用痕ある剥片、剥片、石核、敲石、磨石、礫器、まれに石斧が共伴する。各器種のうちナイフ形石器とスクレイパー

は、他の石器の数量を抜いて量的にかなり多く検出されている。スクレイパーはナイフ形石器の数量に比例して増加する傾向があるが、中にはスクレイパーの方が多く検出される遺跡もあり、当該期の大きな特徴といえよう。なおこうした様相は角錐状石器にも該当しよう。礫器は西之台遺跡B地点の9点を除いて、1〜3点の共伴が目立ち、量的には少ない。また敲石は大規模な遺跡で検出される例が多く、しかもその数量もバラエティーに富んでいる。ナイフ形石器は縦長剥片、横長剥片の双方を素材としている。ナイフ形石器の組み合わせの在り方はB・C・D・F型とまれにA・E型が共存する。特にB・C型の組み合わせをもつ遺跡、C型を主体にB・D型の組み合わせをもつ遺跡、B型のみで構成される遺跡、またE・F・A型の組み合わせを含めて考慮すると、多様となる（白石、1981）。剥片剥離作業は縦長剥片、横長剥片を作出する剥片剥離よりなる。打面を一定の場所に設けず、交互に剥離して横長剥片を剥離していく石核、多方向の剥離面をもつ円盤形の石核、瀬戸内技法第2工程の石核、平坦打面より直接縦長の剥片を作出する石核、打面を直角に転位する石核、また打面の長軸に直交するように、先端が細い縦長剥片を剥取する石核よりなり、多様である（図1、27〜35）。

第1黒色帯の上位より検出された石器群は、武蔵野台地においてIV中1〜IV上層に検出され、13遺跡が確認されている。相模野台地ではB₁〜B₁上が相当し、12遺跡が、また下総台地ではIV層上位に検出され、3遺跡が確認されている。該期は2文化層が連続して層位的に検出されている例がある。例えば東京都前原遺跡、野川遺跡、平代坂遺跡、神奈川県月見野第ⅢA遺跡、第ⅣA遺跡（明治大学考古学研究室ほか、1969）、寺尾遺跡、千葉県木刈峠遺跡（鈴木、1975）等の遺跡がある。遺物の集中地点は神奈川県栗原中丸遺跡第V文化層（大上ほか、1982）の50カ所を最大とし、1〜5カ所の小規模なものが多い。栗原中丸遺跡は石器総数が3,487点、また千葉県東内野遺跡（戸田・篠原、1977）では6,634点といったように、非常に大規模な遺跡である。他にも東京都鈴木遺跡都道地点（戸田・実川ほか、1980, 1981）、鈴木遺跡小学校地点（館野ほか、1980）でも1,500点以上の石器が検出されている。一方こうした大規模遺跡に対して、50点以下の極めて小規模な遺跡もかなり認められている。石器組成はナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、錐状石器、彫器、使用痕ある剥片、加工痕ある

4) 大形石器と小形石器は、前者が核石器及び大形剥片を素材としたものに対し、後者は小形の定形剥片を素材としている。なお、石器の用語は不明瞭なものもあるが、混乱をさける意味で、慣用されている用語を使用した。

剥片、石核、剥片、敲石、磨石、礫器よりなる。石器群のうち前半期に相当する埼玉県砂川遺跡（戸沢，1968）、同鶴ヶ丘遺跡（谷井，1976）、東京都西之台遺跡B地点Ⅳ上、前原遺跡Ⅳ中Ⅰ、廻沢遺跡（武藤，1981）、多摩ニュータウン No. 125（鈴木，1982）、神奈川県寺尾遺跡、月見野第Ⅰ遺跡、栗原中丸遺跡、千葉県木刈峠遺跡第7、12ユニットの諸遺跡では砂川遺跡で指摘された砂川刃器技法（以下砂川型剥片剥離作業）で製作されており、A～F型のナイフ形石器で構成される。特にA・D・E型の結びつきが強い。石器組成としてはナイフ形石器を中心に若干の彫器、スクレイパーを伴っている。又栗原中丸遺跡や月見野第Ⅰ遺跡では数点の尖頭器が伴出している。従って尖頭器を伴わない石器群を一時期として砂川期と限定するか、尖頭器が伴出する段階も含めて砂川期と捉えるか、今後論議を呼ぼう（図1 36～40）。

該期の後半の石器群は東京都新橋遺跡Ⅳ上（中津ほか，1977）、前原遺跡Ⅳ上、高井戸東遺跡Ⅳ上、平代坂遺跡Ⅳ上、埼玉県松ノ木遺跡（田中，1979）、大古里遺跡（織笠，1976）、神奈川県寺尾遺跡Ⅲ（白石，1980）、月見野第ⅣA遺跡、千葉県今島田遺跡（杉原，1971）、東内野遺跡等がある。全般的に小規模遺跡が多いが、前記東内野遺跡は大規模遺跡となっている。石器組成としては、尖頭器の伴出が目立つこと。ナイフ形石器の組成は、C・F型ナイフを中心に各型式のナイフ形石器を伴っている。剥片剥離作業は、砂川型剥片剥離作業で構成される石核も若干あるが、平坦打面で施された石核、多方向の剥離面をもつ石核よりなる（図1，41～51）。

（C） 細石刃を主体とした石器群と尖頭器を主体とした石器群

立川ローム層最上部の軟質ローム層より検出される石器群は、武蔵野台地、下総台地ではⅢ層、相模野台地では第0黒色帯～軟質ローム層（L₁S）が相当する。石器群は細石刃を主体とした石器群、大形木葉形尖頭器を主体とした石器群よりなる。相互の石器群の編年の位置づけは、東京都西之台B地点のⅢ層の層位的出土例が唯一である。即ち（Ⅲ下）剥片→（Ⅲ中）細石器→（Ⅲ上）大形ポイントがそれである（小田，1980）。又相模野台地では、B0より細石刃を主体とした石器群が検出されており、しかも一部のナイフ形石器が伴伴することが数遺跡で確認されている（中村，1980・1981）。細石刃を主体とした遺跡は、500点以上の大規模遺跡と、それ以下の小規模遺跡に区分される。礫群は1カ所ないし拡散したもの以外は認められない。石器組成は細石刃、細石

刃核、スクレイパー、錐状石器、石核、剥片、礫器を中心に、ナイフ形石器、尖頭器、使用痕ある剥片、加工痕ある剥片よりなる。細石刃核は野岳、休場型石核の他に最近では舟底形の細石刃核がかなり普遍的に検出されるようになってきている。一方こうした石器群とは別に北関東地方では、茨城県後野遺跡（後野遺跡調査団，1976）、群馬県榊形遺跡（相沢・関矢，1981）においては湧別技法による細石刃核や舟底形石器が検出され、南関東地方の舟底形石器とも関連しよう。

大形尖頭器を主体とした石器群は、尖頭器、スクレイパー、使用痕ある剥片、石核、礫器を中心に、まれに彫器、錐状石器、磨石が認められている。遺物の集中地点は小規模で、遺物の数量も少ない。礫群も顕著でない。尖頭器を主体とした石器群は、ナイフ形石器の段階に既に認められている。特に相模野台地では第1黒色帯中より軟質ローム層（L₁S）まで継起している。神奈川県月見野ⅣA遺跡では尖頭器を主体としてナイフ形石器、搔器等を伴っている。しかるに武蔵野台地の前原遺跡、西之台遺跡B地点ではナイフ形石器が伴伴していない。今後の課題であろう（図1，52～57）。

石器群の様相

前項で関東地方の石器群を中心として層位的に概観してきたが、各文化層の特徴を明らかにするため、各項目ごとにまとめておくことにする。

遺跡の規模 遺跡は碎片を除いた石器総数が500点以上の大規模な遺跡と、500点以下の小規模な遺跡に便宜区分する。しかしこれら両者の様相をもつ例は一樣⁵⁾でなく、各文化層毎に差異がある。すなわち（1）小規模遺跡を中心に構成されるもの（Ⅶ層）、（2）小規模な遺跡が多い反面、大規模な遺跡が僅少のもの（Xa・Xb・IX・Ⅵ・Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ上層）、（3）小規模な遺跡、大規模な遺跡が共に多く構成されているもの（Ⅳ下・Ⅳ中Ⅰ層）よりなる。

遺物の集中地点 遺物の集中地点の規模は総体的に石器の数量に比例していることが多い。1～3カ所の小規模のものが一般的であるが、Ⅳ下～Ⅳ中Ⅰ層では、大規模な集中地点が形成される場合がある。Ⅳ下層の東京都鈴木遺跡、Ⅳ中Ⅰ層に対比される栗原中丸遺跡Ⅴでは、他遺跡と比べて、石器数量が群を抜いており、拠点の大規模遺跡であった可能性が強い。

礫群の分布 （1）X層aのように礫群が顕著でない例、（2）1・2カ所の小規模な礫群で構成されるもの（Xb・Ⅵ・Ⅳ上・Ⅲ層）、（3）小規模な礫群が多いが、若干規模の大きい礫群をもつもの（Ⅴ・Ⅶ・Ⅳ中Ⅰ層）、（4）

規模の大きい礫群が目立っているもの (X・IV下層) よりなる。

石器組成 X層aとX層b・IX層は前項でも触れたように、前者は錐状石器、スクレイパーを中心に敲石、礫器、石斧、スクレブラ等の石器を伴っている。しかるに後者はナイフ形石器やスクレイパーと共に、X層aの大形石器を共伴している。このような大形石器はIX層をピークとし、VI層の段階では非常に僅少となってくる。そしてV～IV下層の段階になると、再び敲石、礫器、そして一部石斧の共伴も認められ、大形石器は再び凌駕する。該期は角錐状石器の共伴が目立ち、IV中1～IV上層では尖頭器が認められるようになる。

剥片剥離作業と素材 X層aの不定形剥片は節理面を敲いて不定形な剥片を作出している。分割による剥片剥離作業は該期だけの特徴ではなく、IV下層の段階では、横長剥片、IV中～IV上層では尖頭器の素材を分割した例が認められている。ナイフ形石器を主体とした石器群は石刃技法による縦長剥片と横長剥片の双方を素材としている。これらの素材はナイフ形石器の型式と対応するものであるが、さらに剥片を規定する剥片剥離作業まで還元できるものである。

組成の数量比 X層aの錐状石器を主体とした石器群は、各器種共に数量がほぼ一様である。このような在り方はX・b・IX・VII層の石器群も共通しよう。しかるにVI層ではナイフ形石器が他の器種より量的に卓越する例が認められる。そしてIV下・IV中1層ではナイフ形石器のみならず、スクレイパーも発達する。このような様相は尖頭器を主体とした石器群の中で看取される。

ナイフ型石器の型式 X層bのナイフ形石器はB型を中心にE型を伴う。このB型は量的な多寡があるが、ナイフ形石器の全段階に認められるものである。IX層のナイフ形石器はC型を中心にB・D型が認められている。IV下層に共通する点がある。VI層はA～F型よりなるが、A・D・E型で構成される場合が多い。このような様相はIV中1層にも共通する。

以上立川ローム層中に層位的に形成された石器群について概観してきた。中でもナイフ形石器を主体とした石器群は、1万数千年間の長きにわたって継起しており、

文化層も10数枚が看取される例がある。しかしこれらの石器群は決して単一の様相ではなく、非常に複雑な様相をもちながら変化していることは、前記のとおりである。

2. 立川ローム層とその鍵層

日本の旧石器文化の研究の端緒をつくった群馬県岩宿遺跡(杉原, 1956)は、層位的に石器群が検出されたことが重要である。とりわけ最下層の石器群は、黒色帯より出土したことで、後の編年学的研究に少なからず影響を及ぼした。例えば群馬県武井遺跡(杉原, 1955・1977)や栃木県磯山遺跡(芹沢, 1962)では、石器の出土層位が黒色帯中ないし黒色帯上半部にかけて検出されており、岩宿I文化の石器群を含めて黒色帯を基準とした石器群の編年の位置づけが検討された。しかるに各地域の露頭や各遺跡での深掘りによる断面観察では、黒色帯の枚数や堆積状態がやや異なることがわかってきた。例えば相模野台地では6枚、武蔵野台地では2～3枚、下総台地や大宮台地、そして北関東地方では、1ないし2枚の黒色帯しか肉眼では観察されない。一方各地域内の土層状況をみても、相模野台地の第0・1黒色帯は不鮮明な例が多いし、武蔵野台地の野川遺跡では第0黒色帯が検出されている。また、第2黒色帯は上層と下層よりなるが、間層を持つ例、持たない例よりなる。前者は層をなしているもの、ブロック状化したりしていて、多様である(J. E., キダーほか, 1972)。従って広域な地域の黒色帯を基準とした石器群の編年の位置づけは注意が要される(小田, 1979)。そこで黒色帯に変わる鍵層として始良丹沢火山灰(AT)が注目されてきた(町田ほか, 1971; 町田・新井, 1976)(図2参照)。

関東地方では始良丹沢火山灰が肉眼で明瞭に捉えられる地区と、不明瞭でローム化した地区よりなる。前者は相模野台地や下総台地の一部で看取することができる。特に相模野台地では5～10cmの相模野上位スコリア(S₁S)の直下にATが検出されているため、観察は容易である。下総台地では、千葉県星谷津遺跡(杉原・細野・大原, 1978)、東内野遺跡(羽鳥, 1978)、復山谷遺跡(杉原・細野・大原, 1976; 田村, 1982)等でプロッ

- 5) 大規模遺跡はX層aが武蔵野台地の中山谷遺跡、Xa～K層は武蔵台遺跡、IX層では武蔵野台地の高井戸東遺跡IX中、鈴木遺跡都道地点、北関東地方では磯山遺跡が相当しようか。VI層は相模野台地の寺尾遺跡、IV下層は武蔵野台地の前原IV中2層、西之台遺跡B地点IV下層、多摩蘭坂遺跡、鈴木遺跡都道地点、大宮台地では殿山遺跡、相模野台地が栗原中丸遺跡V、下総台地では東内野遺跡等が該当する。

上記大規模遺跡は集中地点の規模が大きいとは言うまでもなく、組成も安定している。とりわけナイフ形石器の量は他遺跡と比べ、際立っている。なお稲田孝司氏によって尖頭器的様相をもつ石器の数量化に基づいた分析がある(稲田, 1981)。

図2 関東地方の上部ローム層と石器の層位的出土例 (■は石器群の出土位置)

1: 東京都野川, 2: 東京都西之台B地点, 3: 東京都前原, 4: 東京都はげうえ, 5: 東京都多摩蘭坂 (武蔵野台地), 6: 神奈川県寺尾, 7: 神奈川県栗原中丸 (相模野台地), 8: 千葉県星谷津, 9: 千葉県復山谷W区 (下総台地), 10: 群馬県岩宿B地点, 11: 栃木県星野 (北関東)

ク状のATが確認されている。一方ATが不明瞭な地区は武蔵野台地, 下総台地の一部, 大宮台地, 北関東地方が該当する。東京都野川遺跡では, 第1黒色帯の下位の20~40cmの黄褐色ローム層(VI層)の下部に火山ガラスの極大値が鉦物分析によって認められた(羽鳥, 1971)。その後旧石器時代の多数の遺跡が検出されたが, 鉦物分析は数例しか実施されていない(白石, 1982)。それ故野川遺跡の指摘を吟味せず, VI層の黄褐色ローム層全体を拡大解釈してAT層としている場合がみられる。一方北関東地方では, 岩宿遺跡B地点において, 第2黒色帯の上部にATが認められることが鉦物分析で判明した(新井, 1971)。また栃木県星野遺跡でも黒色帯の中に第4文化層の石器群があり, その上位にATが鉦物分析で確認されている(新井, 1978; 芹沢, 1979)。一方関東地方の隣県でもATの究明に力が注がれている。東海地方では, 多くのスコリアと3枚の黒色帯が認

められている。とりわけATは第1黒色帯下位の通称「ニセローム」と呼称される黄褐色スコリア層で, 火山ガラスが集中しているという(増島, 1982)。このような在り方は尾上イラウネ遺跡(増島, 1981), 西大曲遺跡, 西願寺遺跡(瀬川, 1980・1982)でも指摘され, 静岡県寺谷遺跡でも鉦物分析によってATが検出されている(加藤, 1980)。

以上の点からATの検出は西南日本を中心とした各遺跡で, 肉眼ないし鉦物分析で判明し, 全国的な石器群の位置づけを任う鍵層として, 空間的にも編年的にも注目されてきた。今後は旧石器研究者が石器群を, 地質学者が地層や鉦物分析を相互にクロスチェックすることが必要であろう。

図3 野川上流域における遺跡群と石器の出土量 (F…少ない. M…多い) (稲田, 1981 を改変)

1: 野川, 2: 武蔵野公園, 3: 前原, 4: 新橋, 5: I. C. U. Loc 15, 6: 中山谷, 7: 西之台B地点, 8: 平代坂, 9: はけうえ, 10: 貫井, 11: 多摩蘭坂, 12: 鈴木小学校, 13: 鈴木都道地点 ('81年), 14: 鈴木都道地点 ('80年), 15: 鈴木都道地点 ('78), 16: 仙川, 17: 高井戸東, 18: 高井戸東西駐車場

3. AT からみた遺跡群の様相

(1) 文化層と遺跡群

1項では石器群の概要を各層位にもとづいて検討してきた。ここでは石器群の層位的出土例を豊富にもつ武蔵野台地の遺跡について見ていくことにする。

層位的出土例は(1)文化層が継起している遺跡, (2)文化層が継続して形成されている遺跡, (3)文化層が単独に形成される遺跡よりなる(図3)。(1)の様相をもつ遺跡は少ない。それに反して(2)の様相をもつ遺跡は多く認められている。それでは各文化層の石器出土数量(碎片を除く)をみよう。(A)500点以上の石器数量で構成される文化層, (B)499~100点の石器数量で構成される文化層, (C)99~50点の石器数量で構成される文化層, (D)49~10点の石器数量で構成される文化層, (E)9~1点の石器群で構成される文化層の5段階に便宜区分して, その様相を索ことにしよう。(A)の様相をもつ遺跡は比較的多く認められる。しかしそれが重複されている例は鈴木遺跡のみである。(B)で構成される遺跡は比較的多く認められる。しかも重複しているケースが多い。例えば野川遺跡IV 4~III層の5

文化層, 前原遺跡IV中1・IV上層の2文化層, 西之台遺跡B地点のIV中2・IV中1層の2文化層, はけうえ遺跡V~IV中2層の3文化層, 高井戸東遺跡IX下・X層の2文化層がそれである。(B)は(A)との重複例が多く, 数量が多く検出される文化層は連続する傾向がある。(C)は西之台遺跡B地点IX・VII・VI層の3文化層, はけうえ遺跡IX・VII層の2文化層を除いて, 大半が単独で形成されている。(D・E)は文化層が連続している例がある。例えば(D)は高井戸東駐車場西遺跡X・IX下層の2文化層, 武蔵野公園遺跡のIV上・III層の2文化層, 平代坂遺跡のIV下・IV中2層の2文化層が重複している。また(E)は高井戸東駐車場西遺跡において, IX中・IX上層の2文化層, 中山谷遺跡のIX・VII層の2文化層よりなる。(D)と(E)は相互に重複する例が多い。また(E)は文化層の中でも目立っている。

以上の点から, 文化層の重複の在り方は, 大規模な遺跡と小規模な遺跡があまり顕著に入りまじることなく, 小規模な遺跡は小規模遺跡で重複している。また大規模な遺跡はその数値に近い数量をもつ遺跡が重複している。このことは拠点的大規模遺跡と露营地が歴史性をもちながら場を選定していた可能性があるうか。

図4 野川上流域の旧石器時代遺跡群
凡例：横線…AT以後 点線…AT以前
(稲田, 1981 を改変)

(2) AT からみた遺跡群の様相

上記の層位的出土例をもつ遺跡群を AT 以前と AT 以後に便宜分けて遺跡の様相を調べてみよう。野川上流域の旧石器時代の遺跡は 20 カ所以上が検出されている。これらの諸遺跡は立川段丘と武蔵野段丘の両段丘上に占地している。とりわけ立川面にある野川遺跡・武蔵野公園遺跡(小田・キリー, 1973), 新橋遺跡は全て AT 以後の文化層が発達しているといえる。一方武蔵野面に認められる遺跡は, AT 以前に発達している遺跡が

中山谷遺跡, 武蔵台遺跡⁶⁾(早川, 1982) よりなる。因に神田川流域の高井戸東遺跡も本例に該当しよう。一方 AT 以後に凌駕する遺跡は, 国際基督教大学構内 Loc. 15 (キダー・小山ほか, 1972), 西之台遺跡 B 地点, 平代坂遺跡, はけうえ遺跡, 多摩蘭坂遺跡(安孫子ほか, 1980) 等があげられよう。又鈴木遺跡では AT 以前と以後共に相当するが, 大略 AT 以後の文化層が発達しているといえる(図4)。それではもう少し時期を限ってみよう。AT 以前の VI 層の遺跡は 5 遺跡が野川上流域で看取されている。大規模遺跡は認められない。しかるに AT 以後の IV 下層の遺跡は 14 遺跡が認められ, そのうち大規模遺跡が 3 遺跡も検出されている。このように両石器群の相違は遺跡形成の在り方にとどまらず, 石器製作技術や石器組成等も大きく異なっている。

(3) AT に相前後する石器群

ナイフ形石器を主体とした石器群は, IV 下層の石器群を中心として, V 層以前の石器群を第 I 期, V~IV 下層の段階を第 II 期, IV 下層以後の石器群を第 III 期に大別している(白石・荒井, 1976; 白石, 1982)。各期内の概要については既に触れたが⁷⁾, ここでは AT に相前後する石器群について, もう少し詳細にみてみよう(図5)。

第 I 期 VI 層

武蔵野台地, 下総台地は VI 層, 相模野台地は B 3 上面(L 3)に検出されている。武蔵野台地では野川遺跡, 国際基督教大学構内遺跡(I.C.U) Loc. 15, 鈴木遺跡都道地点, 西之台遺跡 B 地点, はけうえ遺跡, 埼玉県松ノ木遺跡第 2 地点, 下総台地では復山谷遺跡 VII 上層(田村, 1982), 相模野台地では, 寺尾遺跡・地藏坂遺跡が該当する。ナイフ形石器は鈴木や寺尾で, 碎片を除いた石器数量の割合に対し, 17~22% を数値を示し, 剥片石器の中では 74~76% の高い数値が認められる。このような石器群とは別にナイフ形石器は 2~6 点と少なく他の器種も不安定な遺跡もある。またナイフ形石器も認められず, 石器数量は 3~5 点の石器群で構成される遺跡もある。ナイフ形石器の型式とその割合をみてみよう。鈴木遺跡では 38 点のうち A 型 7 点(不確定 2 点を含む), B 型 7 点, D 型 5 点, E 型 5 点, 不明 14 点よりなる。西之台遺跡 B 地点は 5 点のナイフ形石器のうち 3 点が図示している。A 型 2 点, D 型 1 点よりなる。復山谷遺跡 E 地区は 6 点のナイフ形石器が検出されている。A

6) 武蔵台遺跡の石器は, IX・X 層は 3000 点の石器が検出されている。また IV 層でも 1000 点以上の石器が出土している(早川, 1982)。概報のため詳細不明。

7) 筆者の 3 期区分は第 I 期(X~VI 層), 第 II 期(IV~IV 中 2 層), 第 III 期(IV 中 1~IV 上層)と考えてきた(白石・荒井, 1976)。従来 V 層の資料は僅少であったため, あえて論及してこなかったが, 近年資料が増加したため, この段階を第 II 期と考えておくことにしたい。

図 5 AT に相前後する石器群 (左) 相模野台地 B3 上面~B2u 層出土の石器, (右) 武蔵野台地 VI~IV 中 2 層

型3点, D型2点よりなる。寺尾遺跡は163点のナイフ形石器のうちA型は25点, B型3点, D型29点, E型13点, F型48点, 不明24点の計142点が図示されている。地藏坂遺跡ではナイフ形石器が8点出土している。A型3点(不確定1点), D型4点, E型3点よりなる。

以上の点からナイフ形石器は縦長剝片を素材とし、鈴木遺跡例のように各型式の量的割合はあまり偏差がない点に留意する必要がある。特にB型が比較的多く看取されているが、寺尾遺跡ではB型が少なく、むしろA・D・E・F型の組み合わせが強い。また西之台遺跡B地点、復山谷遺跡ではA・D型、地藏坂遺跡ではA・D・E型で構成される。

第II期V層

ATや相模野上位スコリア(S₁S)の降灰後に形成されたものである。武蔵野台地、下総台地では第1黒色帯中、相模野台地はB2L下底の石器群が相当する。武蔵野台地では、はけうえ遺跡、野川遺跡、西之台遺跡B地点、平代坂遺跡(小田, 1974)、武蔵野公園遺跡、鈴木遺跡、高井戸東遺跡、仙川遺跡(小田, 1974)、打越遺跡、下総台地では星谷津遺跡、相模野台地では地藏坂遺跡、柏ヶ谷長ヲサ遺跡が相当する。ナイフ形石器は鈴木遺跡を除いて1~5点と僅少である。またナイフ形石器をもたない遺跡が5遺跡も認められる。

ナイフ形石器は縦長剝片と横長剝片を素材としている。はけうえ遺跡ではA型?1点, B型?2点, 高井戸東遺跡ではC型、鈴木遺跡都道地点は11点のナイフ形石器が検出されている。A型1点, B型1点, C型4点, D型1点, E型2点, 不明2点よりなる。又44点のナイフ形石器を検出した別地点の鈴木遺跡は都道地点はB型?3点, D型2点, E型1点が図示されている。地藏坂遺跡B2L下底のナイフ形石器は縦長剝片を素材としたF型である。柏ヶ谷長ヲサ遺跡では3点のナイフ形石器が図示されている。いずれも縦長剝片を素材としたB?型, D型, E型が認められる。

以上の点からV層の段階はA~F型のナイフ形石器の型式が認められる。しかしA・F型は量的に顕著でなく、横長剝片を素材としたC型、縦長剝片を素材としたB・D・E型が量的に目立っている。これらのナイフ形石器の型式の在り方から高井戸東遺跡、打越遺跡は上層のIV下層的な石器群であるし、地藏坂遺跡や柏ヶ谷長ヲサ遺跡は下層のVI層的といえる。鈴木遺跡では両者の双方が認められる。

第II期IV下層

武蔵野台地や相模野台地では該期の遺跡が多数検出されている。単独で形成される遺跡が凌駕しているが、2~3枚の複数の文化層が重複している例もある。武蔵野台地では野川遺跡の事例からIV4→IV3b→IV3a層の3文化層が重複し、前原遺跡、平代坂遺跡、はけうえ遺跡、西之台遺跡B地点等ではIV下→IV中2層の2文化層が各々重複している。また相模野台地では、地藏坂遺跡においてB2L間層部→B2U下部→B2U上部の3文化層が看取され、柏ヶ谷長ヲサ遺跡ではB2L中位→B2L上部の2~3文化層が重複している。野川遺跡ではIV4が縦長剝片と横長剝片を素材としてB・D型のナイフ形石器の型式が製作されている。次のIV3bの段階ではC型が僅少であるが検出されるようになる。その他B・D型が比較的多く認められる。IV3aの段階はC型が凌駕し、B・D・F型も共存する。前原遺跡では不確定な点が多いが、C型がIV中2層の段階に量的に増加する。この点野川遺跡の切出形石器の在り方に類似する。一方平代坂遺跡ではIV下層の段階に2点のC型が認められるのに対し、IV中層ではB~D型が各々2点出土している。また西之台遺跡IV下層では、IV下層がC型5点, IV中層では、B型7点, C型4点(不確定2点を含む)、D型3点よりなる、はけうえ遺跡IV下層ではC型2点, D型2点, 不明2点よりなる。はけうえIV中層では、B型11点, C型2点(不確定1点), D型4点, E型2点, 不明2点よりなる。柏ヶ谷長ヲサ遺跡ではB2L中位において、D型の国府型ナイフ形石器を始めとし、B・C・F型が顕著に認められている。またB2L上部では、B・C型が卓越する。また地藏坂遺跡B2L間層部は縦長剝片を素材としたB型?が1点検出されている。B2U下部のナイフ形石器はC型2点, D型1点よりなる。横長剝片を素材とする。B2U上部のナイフ形石器はB型3点(うち1点是不確定)、不明1点よりなる。埼玉県殿山遺跡では国府型ナイフ形石器と共に、黒曜石製のナイフ形石器が多数出土している(石器研究会, 1982)。ナイフ形石器は横長剝片を素材とした例もあるが、縦長剝片を素材とした例が凌駕する。型式はA~E型よりなるが、最も多いのはB型で、基部の状態や、調整加工が多様となっている。

以上の点から切出形石器の多寡は各遺跡によって異なっている。即ち野川遺跡の層位的出土例や殿山遺跡の事例から、切出形石器はより後出であると考えられそうである。しかるに平代坂遺跡を始め、西之台遺跡B地点、そして柏ヶ谷長ヲサ遺跡では、上記の様相とは異なり、

より古い段階から切出形石器は登場しているのである。かくてナイフ形石器の組み合わせの相違なのか（安蒜, 1982）、あるいは切出形石器を主体とした製作技術が客体的な在り方を示すものか問題となろう。また詳細に触れ得なかったが角錐状石器の様相も前述の切出形石器同様かたよりをもっている。

4. 結 語

以上の点から AT に相前後する 石器群は大きく異なっている。

第 I 期 VI 層

- (1) 遺跡の規模と集中地点……大規模遺跡は僅少で、小規模遺跡が多い。集中地点は 1~7 カ所よりなる。
- (2) 礫群の分布……1~2 カ所認められる場合があるが、規模も小さく、少ない。
- (3) 石器組成……ナイフ形石器を中心に、若干のスクレイパー、錐状石器、彫器を共伴する。
- (4) 石器の数量比……ナイフ形石器の量が他器種より卓越する。
- (5) ナイフ形石器の型式……A~F 型よりなるが、A・D・E 型の組み合わせが強い。
- (6) ナイフ形石器等の素材……主として縦長剝片を使用する。

第 II 期 IV 下~IV 中 2 層 (B2 L~B2 U)

- (1) 遺跡の規模と集中地点……大規模遺跡と共に小規模遺跡も多い。遺跡数も急増する。
- (2) 礫群の分布……普遍的に検出され、規模も大きい。
- (3) 石器組成……ナイフ形石器を始め、角錐状石器、スクレイパー、錐状石器、礫器、敲石等が共伴する。
- (4) 石器の数量比……ナイフ形石器とスクレイパーの数量が凌駕している。
- (5) ナイフ形石器の型式……B~D 型を中心にまれに A・E・F 型を共伴する。
- (6) ナイフ形石器等の素材……横長剝片と縦長剝片を素材とする。

第 V 層の段階は第 I 期 VI 層の石器群の様相も残存しているが、第 II 期 IV 下層の様相が萌芽している。礫群や石器組成、ナイフ形石器の型式等は IV 下層に類似する。この段階の直後、即ち IV 下層最下部では、国府型類品ないし、国府型ナイフ形石器の一群に嵌入するようなかたちで共存しているのである。このように様相の異なる石器群の共存の在り方は、AT 以前の第 I 期の石器群には認められなかった現象である。恐らく、AT 以後は、石

器の地域性がより明瞭に分化した時期と評価されようか。このことは、人口の増加を意味するものであろうか。あるいは生活形態の差異を示すものが、また人口の増加によって必然的に生活形態が変容したものであろうか。該期は大規模遺跡と小規模遺跡が各河川域で多数の遺跡が検出されており、より組織的な労働形態が惹起されたものと類推される。

さて AT に相前後して、該期はウルム氷期の最寒期と考えられている。周知のようにこの時期は海面の低下によって大陸と日本列島は陸続になっていたと、推定されており（貝塚・成瀬, 1977）、大陸から多くの動物群が渡来したともいわれている（鈴木・亀井, 1971；長谷川, 1977）。長野県野尻湖では大形動物であるナウマンゾウと、オオツノジカが共存して検出されており、しかも旧石器時代の人間集団と深いかかわりをもっているものと考えられた（野尻湖遺跡調査団, 1975）。これらの大形動物が、どの段階まで生存していたか明らかではないが、筆者の編年の第 I 期 X~VI 層（約 27,000~20,000 年前）まで残存したものと推測される。しかるに AT 以後は、気温が徐々に上昇し、日本列島は島嶼化することになる。そのため、大陸からの動物の流入経路が途絶え、大形動物の絶滅とともに、狩猟の対象は中・小形動物へと変容したものと考えられている。この段階が第 II 期 V~IV 中 2 層（約 20,000~16,000 年前）に該当しようか。このような環境の変化と共に、九州地方から東北地方に分布するナイフ形石器を主体とした石器群は、画期的ともいえる変容を全国的に惹起するのである。

お わ り に

本稿は、関東地方における旧石器文化の層位的出土例を概観し、とりわけ AT に相前後する石器群の様相を詳細にみてきた。その結果 AT を境にして石器群が大きく異なっていることが認識された。こうした石器群の変容が自然環境の変化と符合するものかどうか、興味ある課題といえよう。

最後に文末ではあるが、麻生 優先生には層位論を始め、本論全般にわたって御指導を得た。記して感謝したい（脱稿 昭和 58 年 1 月 28 日、補筆 昭和 58 年 2 月 23 日）。

引 用 文 献

- 安孫子昭二・館野 孝・堀井晶子(1980) 多摩蘭坂遺跡, p. 126.

- 麻生 優 (1975) 概説・日本の旧石器文化。総括編, p. 1—41.
- 相沢忠洋・関矢 晃 (1981) 柵形遺跡調査報告書, p. 1—45.
- 荒井幹夫・田中英司 (1978) 第3地点・打越遺跡, 富士見市文化財調査報告 14, p. 16—31.
- 新井房夫 (1971) 北関東ロームと石器包含層。第四紀研究, 10, p. 317—329.
- 新井房夫 (1978) 火山灰同定の方法と日本の広域火山灰。どるめん, no. 19, p. 18—30.
- 安藤政雄 (1982) 細石器文化における矢出川遺跡群の性格。報告 野辺山シンポジウム, 1981, p. 78—83.
- 安藤政雄 (1973) 関東地方における切出形石器を伴う石器文化の様相 駿台史学, no. 32, p. 23—65.
- 稲田孝司 (1981) 先土器時代遺跡群のとりえ方。報告 野辺山シンポジウム, 1980, 明治大学考古学研究室編集, p. 78—81.
- 後野遺跡調査団編 (1976) 後野遺跡。130p. 後野遺跡調査団。
- 小田静夫 (1974) 調布市仙川遺跡。東京都埋蔵文化財調査報告 2.
- 小田静夫 (1974) 平代坂遺跡発掘調査報告。小金井市文化財調査報告書 3, p. 1—42.
- 小田静夫 (1975) 先土器時代・中山谷遺跡。国際基督教大学考古学センター 1, p. 1—28.
- 小田静夫・伊藤富治夫・C. T. キーラー編 (1976) 前原遺跡。国際基督教大学考古学研究センター 3, p. 1—99.
- 小田 静夫・伊藤富士夫・C. T. キーラー・重住 豊 編 (1977) 高井戸東遺跡。p. 121, 高井戸東遺跡調査会。
- 小田静夫 (1979) 広域火山灰と先土器時代遺跡の編年一特に AT について。史館 11, p. 1—16.
- 小田静夫 (1980) 小金井市西之台遺跡 B 地点。東京都埋蔵文化財調査報告 7, p. 1—82.
- 小田静夫・阿部祥人・中津由紀子編 (1980)。はけうえ。405p., けうえ遺跡調査会。
- 大上周三・鈴木次郎・上田 薫・服部実喜 (1982) 座間市栗原中丸遺跡 (演旨)。第6回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨, p. 1—5.
- 貝塚爽平・成瀬 洋 (1958) 関東ロームと関東平野の第四紀の地史。科学, 28, p. 128—134.
- 加藤芳朗 (1980) 寺谷遺跡をめぐる地形・地質測定・年代。静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書, p. 341—349.
- 神奈川考古同人会編 (1982) シンポジウム南関東地方を中心としたナイフ形石器文化の諸問題。p. 1—151.
- 小林達雄・小田静夫 (1971) 野川先土器時代遺跡の研究。第四紀研究, 10, p. 231—244.
- 相模考古学研究会編 (1974) 地蔵坂遺跡発掘調査報告書。綾瀬市文化財調査報告 2, p. 1—32.
- 白石浩之・荒井幹夫 (1976) 茂呂系ナイフ形石器を主体とした石器群の変遷。考古学研究, 23, p. 9—24.
- 白石浩之 (1980) 第三文化層, 寺尾遺跡。神奈川県埋蔵文化財調査報告 18, p. 123—134.
- 白石浩之 (1981) 茂呂系ナイフ形石器の型式学的研究。考古学研究, 27, p. 35—54.
- 白石浩之 (1982) 考古学と火山灰層序—その4・関東地方の事例。シンポジウム日本考古学と第四紀研究 (演旨)。日本第四紀学会講演要旨集, no. 12, p. 20—25.
- J・E・キダー・小山修三・小田静夫・及川昭文 (1972) 国際基督教大学構内 Loc. 15 の先土器文化。人類学雑誌, 80, p. 23—42.
- 杉原莊介 (1955) 群馬県武井遺跡における石器文化 (演旨)。日本考古学協会第15回総会研究発表要旨, p. 2—3.
- 杉原莊介 (1956) 群馬県岩宿発見の石器文化。明治大学文学部研究報告考古学第一冊 64p.
- 杉原莊介 (1971) 先土器時代の遺跡。土器使用の開始。市川市史 1, p. 112—141.
- 杉原莊介 (1977) 群馬県武井における二つの石器文化。明治大学文学部研究報告 7, p. 1—92.
- 杉原重夫・細野 衙・大原正義 (1978) 科学分析とその結果。佐倉市星谷津遺跡, p. 127—148.
- 杉原重夫・細野 衙・大原正義 (1976) 白井町復山谷遺跡の関東ローム層。千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 VI, p. 179—184.
- 鈴木敬治・亀井節夫 (1968) 第四紀の生物地理。地球科学講座, p. 267—300.
- 鈴木次郎 (1980) 第VI文化層。寺尾遺跡。神奈川県埋蔵文化財調査報告 18, p. 184—291.
- 鈴木俊成 (1982) No. 125 遺跡。多摩ニュータウン遺跡昭和 56 年度分, p. 21—57.
- 鈴木道之助 (1975) 木蒨峠遺跡。千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 III, p. 47—124.
- 瀬川裕一郎 (1980) 休庵層下層の石器群。静岡県考古学研究, 8, p. 10—14.
- 瀬川裕一郎 (1982) 考古学と火山灰層序。東海地方 (演旨)。日本第四紀学会講演要旨集, no. 12, p. 14—19.
- 石器研究会 (1982) 殿山遺跡。上尾市文化財調査報告第11集, p. 1—78.
- 芹沢長介 (1962) 旧石器時代の諸問題。岩波講座日本歴史 1, p. 79—107.
- 芹沢長介 (1979) 日本旧石器時代の編年について。考古学ジャーナル, 167, p. 2—6.
- 館野 孝・堀井昌子 (1980) 鈴木遺跡Ⅲ。小平市立小学校内。p. 1—347.
- 谷井 彪 (1976) 旧石器時代。鶴ヶ丘・埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集, p. 1—115.
- 田中英司 (1979) 松ノ木遺跡。富士見市遺跡調査会調査報告第2集, p. 1—14.
- 田村 隆 (1982) 土層へ先土器時代。千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 VII, p. 1—81.
- 戸田哲也・篠原 正 (1977) 東内野遺跡発掘調査概報, p. 1—28.
- 戸田正勝・実川順一ほか (1980) 都市計画道路小平 2・1・3 号線内。鈴木遺跡Ⅱ, p. 1—482.
- 戸田正勝・実川順一ほか (1981) 都市計画道路小平 2・1・3 号線内。鈴木遺跡Ⅳ, p. 1—364.
- 戸沢充則 (1968) 埼玉県砂川遺跡の石器文化。考古学集刊 4—1, p. 1—42.

- 戸沢充則 (1974) 砂川遺跡の第1次調査と第2次調査まで。砂川先土器時代遺跡, p. 69—70.
- 中村喜代重 (1981) 国道246号大和・厚木バイパス地域内遺跡の調査(演旨)。第4回神奈川県遺跡調査。研究発表要旨, p. 1—5.
- 中村喜代重 (1982) 相模野台地。シンボジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題。p. 48—55.
- 中津由紀子・千浦美智子・小田静夫・J・E・キダー編 (1977) 新橋遺跡。国際基督教大学考古学研究センター4, p. 1—214.
- 野川遺跡調査会 (1971) 野川遺跡の調査。文代財の保護, 3, p. 33—47.
- 野尻湖発掘調査団 (1975) 野尻湖の発掘。278 p.
- 長谷川善和 (1977) 脊椎動物の変遷と分布。日本の第四紀研究, 16, p. 227—243.
- 羽鳥謙三 (1971) 標式地域における立川ローム層の層位について—野川先土器時代遺跡の研究。第四紀研究, 10, p. 244—250.
- 羽鳥謙三 (1978) 土層分析。東内野遺跡第2次発掘調査概報, p. 6—9.
- 早川 泉 (1982) 先土器時代の集落址。季刊考古学 1, p. 83—84.
- 増島 淳 (1981) 尾上イラムネ遺跡の土層について。尾上イラムネ遺跡発掘調査報告第23集, p. 182—184.
- 増島 淳 (1982) 子の神遺跡の土層について。一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書, p. 275—282.
- 町田 洋・鈴木正男・宮崎明子 (1971) 南関東の立川、武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年。第四紀研究, 10, p. 290—305.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰。科学, 46, p. 339—347.
- 武藤康弘 (1981) 先土器時代の文化層について。廻沢北遺跡第5・6次調査概要, p. 6—11.
- 明治大学考古学研究室。月見野遺跡調査団 (1969) 概報月見野遺跡群, p. 1—38.